

# 『萬葉集』を切り刻む

廣岡義隆

○キーワードⅡ形成・原初形・増補・テキスト論・磐姫歌群

## 一、はじめに——巻第一の巻頭歌から

『萬葉集』巻第一の巻頭歌(1・2)は、「泊瀬朝倉宮御宇天皇」(大泊瀬稚武天皇、雄略天皇)の歌として知られている単独長歌である。まずその歌を掲げる。

天皇御製歌

籠毛與 美籠母乳 布久思毛與 美夫君志持

此岳尔 菜採須兒 家告閑 名告紗根

虚見津 山跡乃國者

押奈戸手 吾許曾居 師吉名倍手 吾己曾座

我許背齒 告目 家呼毛名雄母

この長歌作品について中西進氏が次の指摘をしている(注1)。

…上略…疑問を持たれるかもしれない。なぜかと言いますと、

「私こそ言おう。だからあなたも言いなさい。」(C)と言

いながら、実は、その前に自分はどのような人間かというこ

とをすでに言ってしまったですね(B)。…中略…この「そらみつ 大和の国は おしなべて われこそ居れ しきなべて われこそ座せ」(B)の部分をかりに取ってしまますと矛盾は起こらないですね。ずっと続けて読んでみますと「籠もよ み籠持ち 掘串もよ み掘串持ち この岳に菜摘ます兒 家聞かな 名告らさね われこそは 告らめ家をも名をも」(A・C)と云うのですから。どうもこの歌のそもそもの形はそういう形だったらしいのです。

(A・B・Cは廣岡の書き込みによる。)

右の中西氏の言及は、長歌の原初の姿は、AからCへ続いていったものであり、その間に割り込む形でBの王権として詞章を挿入し、それによって大王の歌として形成されたと見るものである。即ち、歌の元の姿は大王とは関わらない民間における妻問いの歌であるということになる。

現在、『萬葉集』巻第一の巻頭歌(1・2)について、その標目が示す年代のままに五世紀の「泊瀬朝倉宮御宇天皇代」の作であると全肯定したり、標目下注の「大泊瀬稚武天皇」(雄略天

皇の作歌であると鶴呑みにはせず、編纂時における雄略天皇への仮託歌であると見ているのが常である。しかしながら『萬葉集』巻第一の主張としては、巻頭歌(1・2)は「泊瀬朝倉宮御宇天皇」による「天皇御製歌」であるとしているものであり、これは無視できない事実である。

さて、『萬葉集』の理解において、例えばこの巻第一の巻頭歌について、「泊瀬朝倉宮御宇天皇」による「天皇御製歌」として一首を理解するのが良いのか、それとも現在見る姿を解体し、その原初形で見るのが良いのかという問題がある。一番歌において、解体した原初形で見るということは、即ち、AからCへと続く

籠毛與 美籠母乳 布久思毛與 美夫君志持

此岳尔 菜採須兒 家告閑 名告紗根

我許背齒 告目 家呼毛名雄母

A C

という歌形で見ることになり、歌の姿としては、

……此の岳に 菜採ます兒 家告らせ 名告らさね(A)

……我こそは 告らめ 家をも名をも(C)

となつて、AとCとはみごとに対応することとなる。即ち、まずAにおいて、目前の春の丘で若菜を摘んでいる「兒」(をとめ)に対して「家告らせ 名告らさね」と男は求婚し、ついでCにおいて、まず私から「告らめ 家をも名をも」と照応することになり、短いながらもその結構は整っている。その間に大王としての名乗りのBが挿入されて、民間歌謡としての「A・C」

の長歌が大王の歌へと変えられたという経緯が明らかとなる。

このことについては、佐竹昭広氏が巻十三の歌謡において、三三三三九番歌(長歌)は、三三三三五番歌(長歌)の歌の中に、サンドイツチ状に(佐竹氏の表現では「すつぽりと包み圍んだ形」で)三三三三六番歌(長歌)の一部が取り込まれていると指摘すると共に、こうしたことはフィンランドの民族叙事詩カレワラ歌謡にも見られることであるとして、カールレ・クローンの『民俗学方法論』を引用して(岩波文庫九八頁)、論を展開した(注2)。佐竹氏は、巻第一の巻頭歌(1・2)については何の言及もしていないのであるが、A・Cの間にBの詞章を挟む形は、まさに佐竹氏が指摘した方式による形成であると押さえることが出来るのである。

形成過程ということでは、例えば『伊勢物語』においても指摘できる。『伊勢物語』は三段階的成立など、その形成論が云々されるが、それは章段単位の論である。今、そうした章段単位の形成論は横へ置き、一つの章段の中においても、増補箇所が容易に指摘できる。例えば、流布本の第一段において、

ついでおもしろき事ともや思ひむ

みちのくのしのふもちすりたれゆゑにみたれそめにし我ならなくに

といふうたの心はへなりむかし人はかくいちはやきみやひをなむしける

という末尾の一節は「春日野」の歌を受け、その前に位置する

第一段本文への注記としてあり、増補された箇所であつて、『伊勢物語』の原姿ではないことが知られている。このように、一つの章段の中においても、作品形成上の先後という「段差」があり、「層」が存在している。

問題は、この増補箇所を含めて作品を理解するのか、どうなのかということになる。例えば鈴木日出男氏は、この言辭までを含めて、次のように指摘する(注3)。

右の初段の末尾、「昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける」の文言は、あくまでも物語の語り手の言葉として定位している。したがつてこれは、作中人物の言動を単に客観的に伝えるだけのものではなく、むしろ語り手の主観を通じた叙述になつていといつてよい。ここでの語り手は、「おいつきて」「ついで……」とも連動させながら、「昔人の」「いちはやきみやび」という微妙な物言いを通して、おのずと歌の力の復権が主張されていることになる。そして、「昔男」とは、過往の時代の男一般をさすのではなく、物語の冒頭に「昔、男……」として設定される、この物語主人公をさすとみななければならない。かりに過去の男一般とすれば、語り手の工夫による「いちはやきみやび」の概念ももちろん崩れてしまふであらう。しかもこの語り手の言葉は、例外的にも作品の本性を表面にさりげなく突き出された言辭であるとみられる。「いちはやきみやび」はもちろん、「みやび」の語が他に用いられないゆえんでもある。

これは、『伊勢物語』について、今見る形で、総体として理解し享受して行こうとする立場での発言となつてゐる。それは享受としてのあるべき一つの形であると理解することができる。しかしながら、それは『伊勢物語』の原姿によるものではない増益した本文による理解であり、後世のフィルターを通しての理解であるということになるのである。このことは、鈴鹿千代乃氏の「「いちはやきみやび」考」においても全く同様の次第である(注4)。

同じ問題点は、『伊勢物語』の第六段において、この「層」がより顕著となつて来る。「これは一条のきさきき……」よりも前を前半部、それ以降を後半部と呼ぶことにする。前半部において男が女を「ぬていきける」とある描写に対して、後半部は「おいていでたりける」とあつて、女を盗み出して逃げてゆく形が前半部と後半部において異なつてゐる。このことにとどまらず、前半部は人物呼称が原則として「男」「女」であるのに対して、後半部は具体的な人物名(二条のきさきき・いとこの女御・ほりかはのおと・くにつねの大納言)が付与され、従つて敬語が使用されている。典型的な違いは前半部において「おに」の登場とその所為で章段が統括されているものが、後半部においては「おに」の正体を暴く形で展開されてゐて、文学としての面白みが消滅してしまつてゐる。『伊勢物語』の作品としての柱は男と女の物語として展開してゐるのである。

## 二、作品の享受と研究と

作品享受のあり方として、現在我々が見る作品の姿においてその作品を理解するのが原則的な基本であると言ってよい。しかし、研究という面においては如何であるだろうか。

作品のテキスト論において、神野志隆光氏は今見る作品としての形で理解して行こうとする。この神野志隆光氏の一連のテキスト論(注5)は我々の蒙を啓いてきた面が少なくない。『日本書紀』の文脈で『古事記』を理解したり、『古事記』の文脈で『日本書紀』を理解してしまうということが、従来ややもするとあったのである。『萬葉集』で言うと、『萬葉集』中に見られる「紀」の記事を現在一般に措定している活字テキストの『日本書紀』本文で理解してしまうような愚を繰り返して来たのである。そうした轍は正さなければならぬ。

同じことは平安時代の作品において『萬葉集』を云々する場合、現行の活字テキストを引用して論じられる場合が常であると言ってよい。しかしながら、平安期の作品においては、「仮名萬葉」として流伝した形で享受されていたわけであり、そうした当時における流伝の姿において『萬葉集』を見ないと眞の理解が得られないことになる。

『萬葉集』に立ち返ると、梶川信行氏は八世紀の《初期万葉》ということを描いて久しい。額田王の歌といっても、額田王生存当時の歌そのものを見ることが出来るわけではなくて、編

纂され『萬葉集』に載った形で見ることが出来るわけであり、それは八世紀の《初期万葉》そのものに他ならないと指摘する(注6)。もつともな指摘である。作品享受という面においては、こうした神野志隆光氏や梶川信行氏の言及は大きな意義を持つ(注7)。先の巻第一の巻頭歌で言うと、作品理解としては、あくまでも現行の『萬葉集』の姿において、「泊瀬朝倉宮御宇天皇」の歌として一首(A・B・C)を理解するのが『萬葉集』理解のイロハであるということになる。

しかしながら、作品研究として、現在残る表層的な形に留まつていては、何一つ前に進むことは出来ないものであるとも言えよう。作品の研究とは、作品の構造化した形を明らかにすることによって、成立過程を分析し、それを立脚点として考究することによって、新たに覚えて来る地平があると言いうことができよう。

作品形成には、その過程がある。作品を分析することによって、「層」状態で形成されている原姿を発掘し、作品形成過程を明らかにすることが出来るのである。掘り下げることによって、それ以前には見えていない作品形成プロセスが明らかとなつて来るのである。

ここに「総体」として『萬葉集』を見る場合と、形成論から『萬葉集』を考究する場合とで、どのように歌の理解が異なるのかということを理解する必要がある。そこで次に、既に発表したことがある内容ではあるが、事例研究を以下に示してみ

よう。

### 三、事例研究

以下、『萬葉集』中の事例三件を挙げ、形成論的研究の一端を示したい。

#### 事例1……卷第二の冒頭歌群（2・八五〜九〇）

卷第二の巻頭に位置する「磐姫皇后」歌群と称される一群について、三段階的形成（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）を示すものであり、その詳細はかつて論じた（注8）。ここでは形成という視点からの大要を示すにとどめる。

#### Ⅰ歌群の形成・第一段階……八五〜八八番歌（四首）

磐姫皇后思天皇御作哥四首

①君之行氣長成奴山多都祢迎加將行待尔可將待（八五）

右一首哥山上憶良臣類聚哥林載焉

②如此許戀乍不有者高山之磐根四卷手死奈麻死物乎（八六）

③在管裳若乎者將待打靡吾黒髮尔霜乃置萬代日（八七）

④秋田之穂上尔霧相朝霞何時邊乃方二我戀將息（八八）

「磐姫皇后」の「御作哥」として①歌〜④歌の四首がまず形

成され、この段階で①歌には「右一首哥山上憶良臣類聚哥林載焉」という左注が付された。このことは、『類聚哥林』には①の

歌しか載っておらず、起承転結構成（注9）の四首の歌群が形成されたのはまさに『萬葉集』巻第二においてであるということ、を雄弁に物語っている。と共に、『類聚哥林』には①歌が「磐姫皇后」の「作哥」として載っていたということも確認できるのである。その意味で『類聚哥林』の①歌が核となつてこの四首歌群は形成されたと見ることが出来る。

#### Ⅱ歌群の形成・第二段階……

……「Ⅰ」に八九番歌及び同題詞・左注の増補（計五首）

或本哥曰

⑤居明而君乎者將待奴婆珠能吾黒髮尔霜者零騰文（八九）

右一首古哥集中出

③歌の類想の歌が「古哥集」にあり、Ⅰが形成された後に右の歌（⑤）が付記された。この付記がⅠと同時にではなくて、Ⅰが一旦形成された後であることは、このⅡの増補が③歌の左注ではなくて、Ⅰの後部に添える形になっていることから判明する。

#### Ⅲ歌群の形成・第三段階……

……「Ⅱ」に歌群全体に関する左注の加筆（現況）

相關

難波高津宮御宇天皇代（大鷦鷯天皇諡曰仁徳天皇）

磐姫皇后思天皇御作哥四首

①君之行氣長成奴山多都祢迎加將待爾可將待 (八五)

右一首哥山上憶良臣類聚哥林載焉

②如此許戀乍不有者高山之磐根四卷手死奈麻死物呼 (八六)

③在管裳君平者將待打摩吾黑髮爾霜乃置萬代日 (八七)

④秋田之穗上尔霧相朝霞何時邊乃方二我戀將息  
或本哥曰 (八八)

⑤居明而君平者將待奴婆珠能吾黑髮爾霜者零騰文 (八九)

右一首古哥集中出

古事記曰輕太子軒輕太郎女故其太子流於伊豫湯也此時衣  
通王不堪戀慕而追往時哥曰

⑥君之行氣長久成奴山多豆乃迎乎將待待爾者不待 (九〇)

(此云山多豆者是今造木者也)

右一首古事記与類聚哥林所說不同哥主亦異焉因檢日本

紀曰難波高津宮御宇大鷦鷯天皇廿二年春正月天皇語皇后

納八田皇女將為妃時皇后不聽愛天皇哥以乞於皇后(云々)

卅年秋九月乙卯朔乙丑皇后遊行紀伊國到熊野岬取其處之

御綱葉而還於是天皇伺皇后不在而娶八田皇女納於宮中時

皇后到難波濟聞天皇合八田皇女大恨之(云々)

亦曰遠飛鳥宮御宇雄朝孀稚子宿祢天皇廿三年春三月甲午

朔庚子木梨輕皇子為太子容姿佳麗見者自感同母妹輕太娘

皇女亦艷妙也(云々)遂竊通乃悒懷少息廿四年夏六月御羹

汁凝以作氷天皇異之卜其所由卜者曰有内乱蓋親々相奸乎

(云々)仍移太娘皇女於伊豫者

今案二代二時不見此哥也

①歌に関わつて⑥の『古事記』所載歌(記歌謡八八番)が、表  
記は現行『古事記』における萬葉仮名表記とは異なる形(た  
だし「山多豆」に関する割注は現行『古事記』と同姿同形)で付記され  
ただけではなく、①歌の作者(哥主)論議を柱とする考察が展開  
されている。これが現在見る『萬葉集』の姿である。即ち、I  
II IIIの三段階の形成過程を経て、今見る『萬葉集』の姿とな  
っていると押さえることができるのである。

事例2……卷第三と卷第十五

この「卷第三と卷第十五」については、かつて「天平の風流  
—遣新羅使人歌における宴—」(注10)において、言及した。当  
稿と同じ当学会誌であることもあり、簡略に記す。

『萬葉集』卷第三の「柿本朝臣人麻呂羈旅歌八首」では、例  
えば、

a 1 珠藻苺 敏馬乎過 夏草之 野嶋之琦尔 舟近着奴

(3・二五〇)

a 2 處女乎過而 夏草乃 野嶋我琦尔 伊保里為吾等者

(同、一本云)

という正訓字を主体とする表記で示されているのに対し、卷第  
十五の遣新羅使人歌群中では、

A 1 多麻藻可流 乎等女乎須疑弓 奈都久佐能 野嶋我左

吉尔 伊保里須和礼波

(15・三六〇)

A2 柿本朝臣人麻呂歌曰 敏馬乎須疑弓 又曰 布祢知可  
豆伎奴 (同、人麻呂歌曰)

と一字一音を主とする萬葉仮名で表記されている。歌として、  
a1とA2とが対応し、a2とA1とが対応することはすくわ  
かる。同様の例が続くが省略する。この表記の違いは、遣新羅  
使人における歌稿原資料にあつては、

(珠藻莉) 處女乎過而夏草乃野嶋我琦尔伊保里為吾等者

(a2)

と記されていたことを示すものである。それを『萬葉集』巻第  
十五編纂者は、

(多麻藻可流) 乎等女乎須疑弓奈都久佐能野嶋我左吉尔伊  
保里須和礼波 (A1)

と、その表記を改めたことになる。これは何を意味する  
かという点、巻第三における左注「一本云」は『萬葉集』巻第  
十五そのものを資料にしての注記であると見るよりも、遣新羅  
使人(天平九年正月、帰任)による巻第十五歌群の「歌稿」(その原  
資料)に基づいた左注注記であると見るのがよい。また、同じ  
巻第三に「黒人羈旅歌八首」があり、

妹母我母一有加母三河有二見自道別不勝鶴 (3・二七六)

水河乃二見之自道別者吾勢毛吾文獨可文将去(同、一本云)  
というように、「柿本朝臣人麻呂羈旅歌八首」の歌群同様に「一  
本云」の歌の付記が存している。この黒人羈旅歌八首における  
一本注記の歌が現存『萬葉集』には他に存在せず、一方、人麻

呂羈旅歌八首中の注記歌は現存『萬葉集』に存在するという不  
整合が存するのであるが、「十五卷本萬葉集」に基づいた注記で  
はなく、それぞれ別個の歌稿資料に基づいた注記であると見  
ると、双方の一本注記における資料上の整合性が出てくる。以  
上により、人麻呂羈旅歌八首及び黒人羈旅歌八首における一本  
注記は「十五卷本萬葉集」による注記ではなくて、歌稿レベル  
に基づく注記であると見ることができるのである。

妹母我母一有加母三河有二見自道別不勝鶴

妹母我母一有加母三河有二見自道別不勝鶴  
一本云水河乃二見之自道別者吾勢毛吾文獨可文将去

(廣瀬本『萬葉集』巻第三、二七六番歌と一本云歌)

このように、巻第三における「一本云」注記の相を浮き彫り  
にすることが出来、編纂時における「一本」の姿が明確となっ  
てくるのである。

事例3……巻第六の歌群(6・一〇二九〜一〇三六)

巻第六の後半部に位置している天平十二年の聖武天皇行幸歌  
群八首に関する形成考究である。この歌群八首中の二首(一〇  
三〇〜一〇三三番歌)については、影山尚之氏(及び新沢典子氏)に  
よって既に指摘されているところである(注11)。この歌群が右  
の二首の増補ということだけではなく、四段階的な形成過程  
をとることについて、かつて論じた(注12)。ここではその大要  
を示す。

I 歌群の形成・第一段階……第一次形成（原初歌群に基づく歌群）

A 河口行宮 内舍人大伴宿祢家持 作歌一首

① 河口之野邊尔廬而夜乃歷者妹之手本師所念鴨（二〇二九）

D 狭残行宮 大伴宿祢家持 作歌二首

④ 天皇之行幸之随吾妹子之手枕不卷月曾歴去家留

（二〇三二）

⑤ 御食國志麻乃海部有之真熊野之小舩尔乘而奥部傍所見

（二〇三三）

E 美濃國多藝行宮 大伴宿祢東人 作歌一首

⑥ 從古人之言來流老人之變若云水曾名尔負瀧之瀨

（二〇三四）

F 大伴宿祢家持 作歌一首

⑦ 田跡河之瀧乎清美香從古官仕兼多藝乃野之上尔

（二〇三五）

G 不破行宮 大伴宿祢家持 作歌一首

⑧ 關無者還尔谷藻打行而妹之手枕卷手宿益乎

（二〇三六）

第一次形成（I）は、影山氏が指摘するように、「○○行宮」

という作詠地と共に、作者名が記された、家持を中心とした歌

群（大伴東人の一首を含む）で構成されている（Fは「美濃國多藝行宮」の略記）。

II 歌群の形成・第二段階……第二次形成（増補歌群の切り継ぎ）

右のIに、次の二首がその題詞と共に切り継ぎ増補された。

B 天皇御製歌一首

② 妹尔戀吾乃松原見渡者潮干乃瀧尔多頭鳴渡

C 丹比屋主真人歌一首

③ 後尔之人乎思久四泥能崎木綿取之泥而好住跡其念

（二〇三一）

新沢典子氏が「家持が手控えにあった自らの歌を、行程順に整理し、その後、歌に含まれる地名を参考に、他の歌人の歌を挿入していった」と指摘しているものである。挿入者が家持であるのか否かは今おいて、新沢氏が指摘するように、まさに「行程順に」一〇三〇～一〇三一番歌（②・③）が切り継ぎの形で増補挿入された。よって、②歌も③歌も「河口行宮」での詠歌ではないのであるが、結果的にI歌群の「○○行宮」の規制を受けることになってしまった。

III 歌群の形成・第三段階……第三次形成（二〇三〇番歌左注の施注）

右のIIに、次の②歌（一〇三〇）左注（左注1）が施された。

右一首今案 吾松原在三重郡 相去河口行宮遠矣 若疑

御在朝明行宮之時 所製御歌 傳者誤之歟（左注1）

IIは、単に行程順に増補されたものに過ぎなかったが、結果的に「○○行宮」の規制を受け、この②歌が「河口行宮」での詠歌ということになってしまった。これをおかしいと理解した

施注者が「吾松原在三重郡。相去河口行宮遠矣。若疑、御在朝

明行宮之時、所製御歌、傳者誤之歟。」と書き込んだ。III・IV



という形成時期の違いは、その左注の「今案」と「案」という手の違いによって判明する。

#### 四、おわりに——形成論の意義

IV歌群の形成・第四段階……第四次形成(一〇三)番歌左注の施注右のIIIに、次の③歌(一〇三)左注(左注2)が施された。

右案 此歌者不有此行之作乎 所以然言 勅大夫從河口行宮還京 勿令從駕焉 何有詠思泥埒作歌哉(左注2)

この左注の注記者は、③歌の「四泥能埒」の位置をよく知っていたのである。「四泥能埒」の位置を知らなければ、「河口行宮」での詠歌という理解でも全く問題は無いのであるが、その位置をよく知っているが故に、疑問が生じたということになる。また、左注の中に「勅大夫從河口行宮還京、勿令從駕焉。」とあり、施注者はこの行幸從駕の一人であったのである。となると、可能性としては、これは「大伴家持の手」ということになろうか(左注時期の先後について、「左注1」をIIIとし、「左注2」をIVとしたのは、このことによる判断である)。この行幸時の詠歌ではない可能性を指摘しながらも、この一首を切り出して(即ち削除して)いないのは、そこまですることに躊躇するものがあつたからである。わずかにこの左注を書き加えるにとどまつたのであつた。この「第四次形成」(IV)によって出来た形が現況である。現在見る形は、この四段階を経ているということが、論理的に指摘できるのである。

右は、作品の形成構造から、その形成過程が確認出来た珍しい事例である(論展開を端折つたところがある。詳しくは元の論に依らしたい)。「萬葉集」に載る他の多くの作品においては、総体としての『萬葉集』から見て行かざるを得ない実態である。しかしながら、この形成過程という観点は、従来から指摘されていることであり、『萬葉集』の巻単位においては、「十五巻本萬葉集」という指摘(注13)もこの形成論に他ならない。こうした作品形成過程は、作品を解く鍵となるものである。その形成過程が単なる推測に由来するものであれば、それは脆弱なことは遊びに他ならないが、確かな論理によって形成過程を明確に構築することは、作品における原初の作品層や作品の核が明らかになるものであり、ひいては作品における質的理解(深まり)が期待できるものとなる。

『萬葉集』を切り刻む」と題しはしたが、単なる解剖ではない。切り刻むことによって、総体としての『萬葉集』の作品構造を明らかにしようとするための行為であり、その形成を明らかにすることによって、作品の理解がより深まることを企図するものである。表層的表面的な理解から、層なす作品構造の内部に立ち入ることによって、作品の理解を深めようとするものであり、他の事項を援用しての作品理解ではなく、作品が有している内部構造(内部徴証)から作品の形成的理解を得ようとい

うものである。

「泊瀬朝倉宮御宇天皇」の歌にあつては、歌の祖形が明らかになると共に、萬葉卷第一編者がどういう形で「泊瀬朝倉宮御宇天皇」の歌として仕立て上げたのかということが明らかとなる。

卷第二の巻頭の磐姫皇后の歌にあつては、萬葉卷第二編者が『類聚歌林』の一首の歌を核に、当時存した雑多な歌を寄せ集めて（注14）、磐姫皇后の歌四首としたものであり、それに注記が段階を踏んで増益していった形が現在の姿であるということが明らかとなる。

卷第三の柿本人麻呂の歌や高市黒人の歌にあつては、「八首歌群」における二本注記が、「八首歌群」が一旦成つた後における、歌稿資料（萬葉編纂資料）からの注記書込みであるということが明らかとなる。

卷第六の天平十二年聖武天皇行幸歌群では、その当初は「家持歌稿」に基づいた六首であり、その後二首が増補され、更にその後二段階的に左注が付記されたものが現在見る卷第六の形であり、その左注内容の不審についてもこの増補を分析することによって明らかにすることが出来るということがわかつて来る。

このように形成過程を明らかにすることによって、今見る『萬葉集』として在る形が、より明確にその実相を捕捉することが出来ることになり、今在る萬葉歌の十全なる理解が得られるこ

とになるのである。

【注】

1 中西進氏『万葉の長歌』上（教育出版、一九八二年二月）。ここで中西氏は一般向きにわかりやすく語りかけている。この書は、NHKラジオの古典講読で放送されたものによつてゐるからである。これより前に中西氏は、『雄略御製の伝誦』（『萬葉』四三号、一九六二年一月、同氏『万葉集の比較文学的研究』所収）において、卷第一巻頭歌の定着が天武、持統あたりであることと、「複式構成」であることを指摘してはいるが、私が引用した形による明快な指摘はまだ行つていない。その意味において、この『万葉の長歌』を引用した。

2 佐竹昭広氏『萬葉集に於ける誤傳の一例』（『国語国文』二六巻一号、一九五七年一月。同氏『萬葉集抜書』に「調使首見屍作歌一首」の題名で所収。『佐竹昭広集』第一巻所収）。

3 鈴木日出男氏「みやび」「まめ」など『伊勢物語』注解ノートから（『成蹊國文』四一号、二〇〇八年三月）。

4 鈴鹿千代乃氏「いははやきみやび」考（『青木周平先生追悼論文集刊行会』『古代文芸論叢』二〇〇九年一月、所収）。

5 神野志隆光氏『古事記と日本書紀』（現代新書、講談社、一九九九年一月）、同氏『複数の「古代」』（現代新書、講談社、二〇〇七年一〇月）、同氏『変奏される日本書紀』（東京大学出版会、二〇〇九年七月）などに代表される氏の一連のテキスト研究に関する論考。

6 梶川信行氏「八世紀の『初期万葉』」(『上代文学』八〇号、一九九八年四月)、同氏「麻績王伝承の転生——八世紀の『初期万葉』——」(『美夫君志』二六号、二〇〇三年三月)などに代表される氏の一連の諸論考。

7 廣岡義隆「初期万葉の資料について——額田王関係歌稿——」(上代文学会研究叢書『初期万葉論』笠間書院、二〇〇七年五月)の論中で示した古い用字使用の相は、その原資料性を余すことなく伝えていると私は見るものである。

8 廣岡義隆「磐姫皇后歌群の形成——『萬葉集』巻第二、巻頭歌群の形成と史的背景——」(和歌文学会編『和歌を歴史から読む』笠間書院、二〇〇二年一〇月)。

9 御歌四首の起承転結構成を指摘したのは山田孝雄氏である(同氏『萬葉集講義』巻第二、一九三二年七月)。

10 廣岡義隆「天平の風流——道新羅使人歌における哀——」(『三重大大学日本語学文学』一六号、二〇〇五年六月)。この論の元に、廣岡義隆「黒人の羈旅歌八首」(『セミナー』万葉の歌人と作品)第三巻、和泉書院、一九九九年一二月)の末尾への補記がある。なお、大浦誠士氏はこれを受けて、その後、「これらを概ね「実録」として捉える論では、表記面と用語面からの論拠が示されている。…中略…この表記形態の異なりについては、廣岡義隆「黒人の羈旅歌八首」が」として私の文を引いて、「と述べている通りであろう」と言及している。(大浦誠士氏『万葉集の様式と表現』笠間書院、二〇〇八年六月、二四五〜二四六頁)。

11 影山尚之氏「聖武天皇「東国行幸時歌群」の形成」(『解釈』三八巻八号、一九九二年八月)。新沢典子氏「歌に示された聖武朝史——巻六・

一〇二九〜四三の配列をめぐる——」(『名古屋大学国語国文学』九七号、二〇〇五年一二月)。

12 廣岡義隆「狹残行宮における大伴家持詠について」(『三重大大学日本語学文学』一六号、二〇〇五年六月)。廣岡『行幸宴歌論』和泉書院、二〇一〇年三月、所収。

13 伊藤博氏「二十五卷本万葉」の意味するもの(当初の「十六卷本万葉集」(一九六六年七月)を改稿し、同氏の古代和歌史研究2『萬葉集の構造と成立 下』に所収(瑞書房、一九七四年一月)。及び伊藤博氏「目録の論」(初発『萬葉集研究』第三集、一九七四年六月、同上)『萬葉集の構造と成立 下』所収。北井勝也氏「廣瀬本万葉集目録に関する二三の問題」(『美夫君志』五四号、一九九七年三月)参照。

14 廣岡義隆、注8に同じ。

\* [附記] 当稿は、二〇一〇年六月二六日(土)に開催された三重大大学日本語学文学会大会における講演会において、同題で話した内容をまとめたものである。

「ひろおか よしたか 本学元教員」